

# インド仏蹟巡拝日記抄



伊 藤 真 徹

佛教大学仏教学研究室の呼掛けで、インド仏蹟研修旅行団を結成し、昭和四十八年十二月二十一日伊丹空港を飛立った一行は二十三名。釈尊の仏恩を報ぜんとする七十九歳の老僧から若冠二十に及ばぬ男女の仏教学徒諸君等多彩である。九時集合、大阪エアポートホテル、月の間で結団式、十二時半エアインデア航空三十一便のスチュアデスの合掌に迎えられて機上の人となる。香港、バンコック空港で休憩、一路インドへ。ボンベイ着は夜半ながら暑気は日本の八月並みで、扇子を離すことはできぬ。

出発前に知らされたインド国内航空のストは未解決のこう着状態、加うるに一部鉄道にも波及しているとかで、前途の多難が予想される。日程の交通機関の利用は変更しても、如何に苦難多くとも、ここまで来て見学巡拝の地は変更されない決意を確めた。

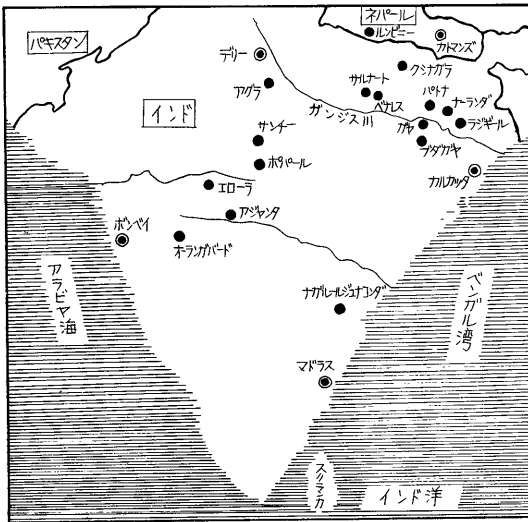
ホテルに入っても三時間半の仮睡で、二十二日早晩、暗やみの中バスを停車場に走らす。駅は人と荷物で膨れあがり、足の踏み場もない、さすが人口世界第二位の国柄を思い知らされる。マンマードでバスと乗換え、第一日の見学地エローラに着いたのは日が西に傾き、

さし込む陽光で窟院見学には好適である。この窟院は四世紀から十三世紀に渉って彫られた仏教、ヒンズー教、ジャイナ教の寺院で、特に第十六窟のカイサラ寺院は壮大優美で、ラシュトラクタ朝のクリシュナ王によって初められ、約二百年以上の歳月を費し、九七五年に完成したことを知り、その恐るべきエネルギーと忍耐は信仰の然らしめるところと驚いた。全体で三十四窟あるが、第十と第十二窟は仏教窟で懇ろに見学し、この三窟以外は割愛したが、古代インド人の宗教心の深さを知らされると共に、多くのインド学術書に掲載せられていて、心の銀幕に映し残されている仏、菩薩像にじかに出遭えた心地して懐しい。星のまばたく頃アウランガバートに着く。この地はボンベイから飛行機で一時間の距離にあつて、ここを基地としてエローラ、アジヤンタ、サンチ見学の予定であつたが、ストのためサンチの塔を見学することは放棄断念せざるをえないので、悔いも残り万斛の涙をのむ。

二十三日、ムガル帝王時代と思われる建物や回教寺院を車窓に眺め、バスを走らすと暫し、デカンのタージマハールといわれ

るビビ・カ・マクバラの宏壮な大理石造の廟を参観する。各大理石に彫出され、また透かし彫りの幾何模様の美しさ等、技巧の美に驚かされ、古代帝王の権勢と豪華な生活の一端に触れることができた。

さらに急坂を登ること数km、アウランガバードの窟院に到る。エローラの窟院は前面に緩やかな平地が拡げているが、ここは岩山の断崖に約2kmにわたり、九の窟院が連なつて



いる。長い歳月は容赦なく崩壊して、いまは第三、第四の二窟のみ昔の姿を留め、特に第三窟は美術的に優れ、第四窟はエローラやアジャンタのそれよりも古いと考証されている。

終日山らしい姿もない高原を馳り、一瞬にしてサタマラ山系の溪谷へと、羊腸たる急坂を下り、思わず手に汗を握ることしばしば、漸くアジャンタに着いた。谷間の駐車場は人

と車で雑踏、肩肩相摩すの形容がピッタリである。つま先き上がり坂道を登り、山膚の斜面にしつらえた小径に肝を冷しながら第一窟にたどり着いた時は息も切れんばかりである。この窟院群は長い間土中に眠っていたが、一八一九年谷を距てた対岸に虎狩りに来た英国人によって発見せられ、逐次発掘せられ世界に喧伝され、世界の文化の精華となった。

この日はクリスマス・ホリデーで見学の団体も多く、多くの窟の入口は既に陰りながら、西面する第一窟に照りつける陽光に、汗は止めどもなく流れる。青少年の団体見学が終って後漸く

入場を許された。すでに参観者も少なく十分に見学するよう配慮された掛り員に感謝しつつ、電光に照し出される精巧な彫刻の数かず、彩り鮮かな壁面や天井の絵画、模様等古代人の技巧の優秀さに驚嘆するのみである。殊に画面に描かれた菩薩像は法隆寺の弥陀三尊の図柄に彷彿とし、日本の仏教美術の親しに巡り会えた思いがする。

インド政庁の高官の宿舎となる部屋が提供されて老人組みは寝たが、夜半消灯され早朝の出発準備は懐中電灯が唯一の頼り、終日バスと汽車でボンベイには夕刻着く。クリスマス・イブの夕餉は豪華で、インド古典舞踊と音楽に旅の疲れを忘れた。翌二十五日は午前中自由行動、午後はインド門近くで機動船に乗り、真夏の如き太陽の直射を避け、エレファント島のヒンズー教の窟院を訪れ、神秘をこめる神神の容姿に酔うた。涼風やや催す頃、市内見学と夜景展望に出かけ、そのままクリスマスに賑う沿道の景観を眺めながら郊外のサン・サンホテルに入り、遅い夕食は音楽とショーで楽しいひと時であった。夜間照明に浮き出たブルーに人影もなく、綿を被ったクリスマス・ツリーも場所を取り違えた

ようで奇異である。夜半十一時空港に行きニューデリー行きの便を待ったが、先方の空港が濃霧のため欠航、急遽近くのホテルで一泊するの止むなき仕儀となる。翌二十六日十時発の便を待ったが、デリー上空の情況が好転せず結局十二時四十分まで待った。プロペラ機は下界の眺めが素晴らしい。ホテルで小憩後ニューデリーの観光に出る。この日の見学で印象深いのは、マハトマ・ガンジー火葬の聖地公園ラージ・カートとラール・キラである。ラール・キラはレッド・フォートと呼ばれ、赤い砂岩の城壁で囲まれている。城内の斜陽に映える公的謁見の宮殿、イタリヤ製の王座を間近に仰ぎ、さらに私的謁見の宮殿に歩を進め、大理石の柱やアーチに刻まれた草花模様の彫刻の美しさ、また王者の優雅な日常生活を偲ぶ数かずの設らいに豪華けん然な名残に時の流れるのも忘れた。

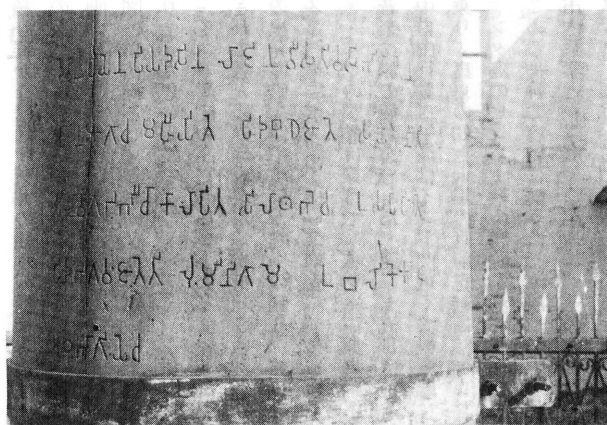
二十七日も空港でアグラ便を待ったが、濃霧のため容易に飛べず、やっと午後二時軍用機も発着するアグラ空港に着いた。直ちにタージ・マハールを見学した。この建物はレッド・フォートを築いたムガル五代皇帝ジャハ・ジャハンが三十九歳でみまかった愛妃ム

ムタス・マハルの死をいたみ、大理石で二十二年の歳月と二万の工匠をペルシャ、トルコ等のイスラム圏の各地から動員して一六五四年に完成し、レッド・フォートの居城から遠望して愛妃を偲んだという純愛物語が伝えられている。廟の中央ドームは高さ六五米、台座の一辺は九四米で、その構成美は遠望に優れ、近寄って見れば技工の精美に驚く。ドームの直下には皇帝と愛妃の柩が安置され永き眠りについている。

ついでアグラ城と宮崎博士が建設せられた救贖センターを訪れた。博士が人類愛にもえ、愛の手をさしのべ、孜孜として努力せられた結実の跡を見聞し、いま異国の地で博士の偉業を継承して献身せられていられる諸士に深く敬意の頭を垂れ、各自醸出の貧者の一灯を贈る。

この地から一夜と一日のバスの旅が続く。ゲストハウスで目覚め、二十九日暁闇の中、海の如く拡がるジャングルを見下すコーサラ国舎衛城趾に立つ。西域記にしろす如き過去の繁栄の片鱗もなく、時の流れの遙かな移り変りを念う。ついで祇園精舎を訪れた。仏陀の遺跡巡拝の第一歩を印した。玄奘三蔵は「今

はすでに荒廃す」と記しているが、その荒廃中の遺物すら今は何物もない。菩提樹の茂る道路を挟む数多くの遺構について、黄衣の僧の説明と標識を読みながら久しく逍遙した。



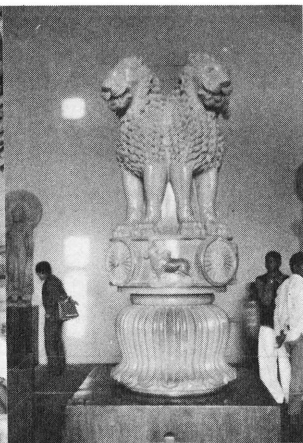
アシヨカ王石柱刻文

アシヨカ王は灌頂二十年を過ぎた年に、ここを訪れて釈尊降誕を記念するために馬像を有する石柱を建てしめた。ブルンビニ村は税金を免ぜられ、生産の八分の一のみを取めよ」と記されている。

この日九時宿舎発。またバスの旅が続き午後二時ネパール領に入つて八kmのルンビニに到着した。見学所要時間は一時間の制約、直ちにマヤ堂に直行、堂内にはマヤ夫人と待女とシッタタ太子の彫像が安置され、天井から差し込む光線に降誕の状が浮き出している。アショカ王建立の石柱は玄奘時代落雷のため中央で折れていたことを記録するが、一八九七年フエラー氏が刻文のある根底部を発掘解読し、いま小高い丘に建てられている。再びバスにゆられて二五〇kmの旅が続き、闇空に金の砂子をまいたように星の美しいクシナガラに着いた。翌朝釈尊入涅槃の聖地、道路を距てて樹木で覆われた聖域に歩を運ぶ。大理石造りのマハバリニルバアーナ寺には六メートルの巨大な涅槃像が安置され、頭北面西、黄衣を着し花が捧げられている。誦經念仏、城内を逍遙、サラ樹の落葉を拾う。

十二月三十日九時半、クシナガラ発、釈尊をダビしたチャイチャ塚を遠望し、一路サルナートへ。西に日の傾く頃鹿野苑に着き、広大な聖域の隅ずみまで歩き廻り、塔の周囲を花や幾何模様彫刻で飾つたダメークの四六メートルの円筒形の塔を仰ぎ、アショカ王建

立の石柱の基部に目を注ぐ。博物館に急ぎ玄関正面にすえられた石柱上部を飾る四頭の獅子像の美は眺めて飽きることがない。菩薩像、初転法輪の仏陀の坐像、館内すべての仏像や



写真右

写真左

アショカ王石柱頭部を飾る「四頭の獅子像」(サルナート考古博物館蔵)  
有名なブダガヤ大塔の真下にある菩提樹・仏足跡。

彫刻は写真で見たことのある、一度は実物を見たいと願つたあこがれの彫像のみである。夕闇せまる頃ベナレスに入る。

三十一日早朝ヒンズー教徒の聖地の沐浴風景の見学に出る。賑やかな音楽と敬虔な沐浴に心を打たれ、対岸の水平線に出る太陽を拝む。朝食後市内見物を楽しみ、ベナレス大学の構内をバスで一巡し、構内のヒンズー寺院を参観し、市内のモンキー寺院で愛きょうを振りまく猿をカメラに納め、黄金寺を間近かに仰ぐ。何処も人も雑踏し、一行とはぐれないように努力するだけで精一杯である。サリー工場を見学し、土産物の数かずを仕入れて汽車に乗る。ネパール航空利用のためパटनाに向つたが、途中機関の故障によつて立往生、日は暮れ星はまばたき夜は更けても発車する気配もない。車内は真つ暗、お腹は空く、辛い携帯燃料とガンジス河の聖水ご持参の好意によりたき上げたラーメンは無上の珍味として忘れられぬ。宿舎に入った頃は暦は改まつて正月元日、旅行社の心尽しのお餅と祝杯をあげ、お目出たうの挨拶後床に入る。

元旦空路ネパールに入り、カトマンズの市内見学シヴァ神殿とハスマンドカ宮殿、ラマ

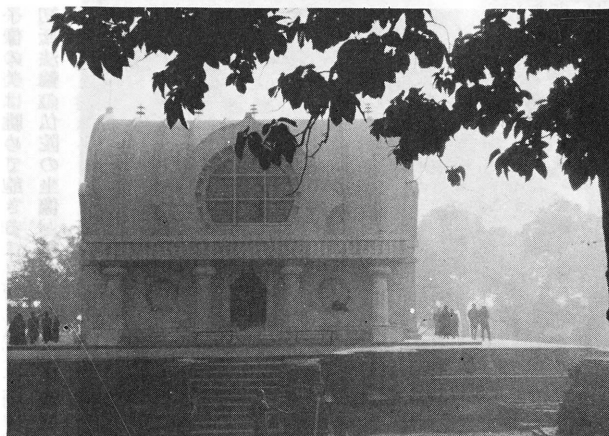
教寺院等、殊に授産工場でじゅうたんを織るチベット難民女工の物哀れな姿に心が痛む。

世界的石油不足のため、定期便以外一切飛行まかりならぬとの厳命により、自動車でインド入りすることに決定して就寝する。

五時ホテルを出て、ヒマラヤ展望台ドゥーケールの丘に登る。旭光に映える中部ヒマラヤ連峰の白金色に輝く美しさ、間近の山はまだ薄墨色の霧の中に眠っている。日出先照高山の経意を明らかに知ることができた。午前中自由行動、十二時タクシー七台に分乗して、山また山の山腹の動揺多い路を走る。

国境近いインドの町で、インドのバスに乘継いだのは午後九時、バス内で一夜を明かし、三日はナーランダ寺跡を見学したが、現在は往時の何分の一かが発掘せられているのみとかで、玄奘在留当時の壮大さが思われた。ついでラジギールに急ぎ、霊鷲山の坂路をあえぎながら登り、釈尊が教えを説れた場所と示される基礎の如きレンガの囲いに花香をそなえて誦経念仏し、またイダイケ夫人の住んだ王舎城を俯瞰して感涙を催す。下山後のココラの味は甘露の如く蘇ることができた。竹林精舎を左に見て、聖地ブダガヤに近付

き、大塔を遙かに見付け車内から歓声がわく。金剛宝座を覆う菩提樹の茂みから突き出る五二メートルの九層の大塔は、夢にまで見た懐しの大精舎である。周匝する欄楯を見て内部に入り仏像を低頭作礼した。薄暮、印度山日本



ビルマの仏教徒によって建立されたクシナガラの涅槃寺、六メートルにおよぶ涅槃像が安置されている。

寺を訪れ、落慶法要の名残りをとどめる仏前に端坐合掌、馴染み法具で誦経念仏した。大塔を拜し四大仏蹟巡拝後の感激は来て見てよかつたの一語に尽きる。

漸く日程は予定の如く、四日カルカッタ市内見学、五日タイ国入り、午後から日本婦人のガイドにより市内名所を一巡した。六日十一時バンコック発、途中香港休息後一路帰国の予定であつたが手続上の手ちがい、団員名簿が空港当局に届いてないため、インド航空に乘れず止むなくアメリカン航空で香港まで来て一泊。香港の夜景と珍味を満喫し、六日は午前中自由行動、午後買物に囊中は大へん軽くなった。予定の航空便で大阪空港に着陸したのは午後八時前、香港の夜景は立体的であるが、大阪の夜景は平面的で上空からでなければ味えぬ美しさである。ボンベイ入りしてから今まで、夏装束に近い半月を送ったが、大阪上空で地上は摂氏三度とアナウンスされ、急ぎ防寒着を取り出した。荷物を受け取る前に解団式を行い、入国手続き後出迎える人に囲まれながら、無事故と健康で目的を果たしたことを祝福しつつ、別れを惜んで家路についた。

(本学教授)